

国際交流における学生の学び

——グローバル人材育成の観点から——

平野 亜也子

カンダボダ・B・パラバート

要 旨

本論文は、ハイブリッドで実施された英語プレゼンテーション大会への参加とその準備段階であるオンライン国際協働活動に約4ヶ月間取り組んだ学生が、どのような力を身につけたと感じるのかを論ずる。本研究の参加者は関西の2大学に所属する15名の大学生で、彼らはアジアの学生が協働で英語プレゼンテーションを行うWorld Youth Meeting (WYM)に参加するとともに、WYM本番に向けて台湾の学生たちとオンラインで英語による協働活動を進めた。研究課題は、(1) WYMへの取り組みで学生は「社会人基礎力」が身についたと感じるのか (2) WYMへの取り組みで学生は「英語力」が身についたと感じるのか (3) WYMへの取り組みで学生はどのような点に困難さを感じるのか、またその困難点に英語習熟度の影響はあるのか (4) WYMへの取り組みで学生は何を学んだと感じるのか、の4つであった。参加者に質問紙調査を実施し、得られた回答データを分析した結果、参加者は「社会人基礎力」全般が身につく英語のスピーキング力とリスニング力が身についたと感じた一方で、「社会人基礎力」の中の「規律性」は身についたと感じておらず、英語のライティング力とリーディング力について向上を感じなかったことが明らかになった。英語に対する自信のなさを多くの参加者が報告していたが、英語習熟度によって困難と感じる内容は少し異なっていた。また、学生は英語表現、発表の方法、調査方法、チームワーク、異文化理解、リーダーシップの大切さなどを学んだと感じていたことがわかった。本研究結果に基づき、今後国際交流に取り組む際の注意点と改善策を議論し、提案する。

キーワード: コミュニケーション力, 社会人基礎力, 英語運用能力, 国際交流, 協働実践

1. はじめに

急速なグローバル化の発展に伴い、日本でもグローバル人材の育成が喫緊の課題となっている。それに伴い、多くの大学がグローバル人材の育成に力を注いできた。諏訪(2013)は、グローバル人材育成のためには経済産業省(2006)が提示した「社会人基礎力」のような人間としての基盤的能力をきちんと鍛え、その上で国際共通語の英語と現地で使われる言語の運用能力を備えさせる必要があるとしている。この「社会人基礎力」とは、組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力(経済産業省, 2006)であり、3つの力「考え抜く力 シンキング」「チームで働く力 チームワーク」「前に踏み出す力 アクション」が示されている。さらに、これら3つの力は12の能力要素から構成されている。

例えば、「考え抜く力 シンキング」は、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」という能力要素であり、「チームで働く力 チームワーク」は「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」となっている。また、「前に踏み出す力 アクション」は「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」がその能力要素である。

今後さらに進むと考えられるグローバル化社会で地球市民としての役割を担うためには、このような「社会人基礎力」に加え、多様な文化背景を持つ人々と円滑にコミュニケーションを図るツールとしての英語力と異文化理解力も必要である。学生がこれらの力を身につけられるように、大学は海外留学、海外研修そして国際交流などを積極的に支援してきた。

しかし、2020年の春ごろから急速に拡大したCOVID-19の影響で、これまで当たり前に行っていた海外留学や海外研修が一気に中止となった。そのため、移動が不要な環境で学生の国際交流を継続させるために、教員は様々な形を模索し、ビデオ会議ツールを使用したオンライン国際交流を導入する動きが一気に加速した。

オンライン国際交流には様々な形があるが、本研究ではWorld Youth Meeting (WYM) という英語プレゼンテーション大会への出場とそれに向けた約4ヶ月におよぶ活動を取りあげる。WYMでは、与えられた大きなテーマに基づき、母語の異なるアジアの学生たちがチームを組みオンラインで協働しながら英語プレゼンテーションを行う。WYMは優れたプレゼンテーションに賞を与えるコンテスト方式であるため、学生たちはよりよいものを作ろうと競い合い、チームの中でお互いの意見を述べ合うことになる。その過程では、実社会でみられる意見の対立 (conflict) や摩擦 (abrasion) も起こる。そのため、WYMへの取り組みを通して、学生は英語力の向上だけではなく、「考え抜く力」、「チームで働く力」、「前に踏み出す力」、といった社会人基礎力を身につけることが可能だと考えられる。

カンダボダ (2021) やKandaboda, Sakamoto & Hirano (2022) は、このWYMに参加した学生を対象に質問紙調査や観察の手法でデータを取り、その成果を報告している。しかし、学生が英語力を向上させたと感じているのか、またグローバル人材に必要なとされる力を身につけたと感じているのかどうかは明らかになっていない。そこで本研究では、WYMに参加した学生が、英語の読む、聞く、話す、書く、の4技能と、社会人基礎力の「考え抜く力」、「チームで働く力」、「前に踏み出す力」を身につけたと感じるのかどうかを調査する。さらに、どのような状況で困難さや喜びを感じたのかを明らかにし、協働活動における学生からの視点を考察する。

2. 先行研究

(1) オンライン国際交流

2020年の春ごろから急速に拡大したCOVID-19の影響で、オンライン国際交流に関する研

究が一気に加速した。小西（2021）は、ビデオチャットを使って英語を学ぶ日本人大学生と日本語を学ぶオーストラリア人大学生とのタンデム言語学習（言語交換）の様子を録画し、分析した。その結果、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、積極的に交流を楽しむ態度、文化面で情報交換を楽しむ様子が見られたため、ビデオチャットによるオンライン国際交流は語学学習だけではない大きな学びをもたらしたと報告している。また、学生の自発的な協働態度がオンライン国際交流には必須である、と結論づけている。なお、この小西（2021）の実践は1回70分の取り組みであり、一学期間の中で、準備、当日および振り返りの3回分の授業を割り当てたものであった。

一方山内（2014）は、9週間にわたる国際交流における学生の学びを観察し、報告している。この研究では、中国語を学ぶ日本人中国語学習者と日本語を学ぶ中国人日本語学習者が、オンラインビデオツールであるSkypeとテキストチャットを用いて交流した。その結果、同期型・非同期型（Skypeとテキストチャット）の組み合わせがうまく機能し、自由にまかせる交流よりも具体的なタスクを課す方が参加頻度の増加につながった、と結論づけている。ただし、この研究は中国語学習者と日本語学習者とを対象にしたもので、英語学習者同士を対象にしたものではなかった。

古村（2022）は、コスタリカの大学生と日本人大学生とのオンライン交流において、日本の大学生が「どのように感じたのか、何を学んだのか」について報告している。8週間におよぶこの交流では、英語力に不安感を持つ学生がいたこと、楽しみを感じた学生がいたこと、文化の差異や共通点を感じていたこと、英語力への動機づけが高まった学生がいたこと、などが報告されている。この研究での交流は基本的に非同期型であり、テキストでのやり取りが多かった。

(2) World Youth Meeting

コロナ禍以降は、小西（2021）、山内（2014）、古村（2022）で報告されているようなオンラインのみでの国際交流が増えてきているが、本稿で取り上げるWYMにおける取り組みは、対面形式とハイブリッド形式も取り入れている点、さらに本番と準備期間があるという点から、非常にユニークな活動だと考えられる。WYMは、日本の大学が主催している国際英語プレゼンテーション大会で、1999年より現在に至るまで毎年開催されてきており、コロナ禍前は、対面で実施されてきた。その本番のプレゼンテーション大会に向けて、母語の異なるアジアの学生が、数ヶ月間オンラインで準備を進める、という形式は現在まで変わっていない。

WYMの目的の一つは、グローバル人材育成であり、異文化理解力、英語での交渉力および状況把握力などを学生に備えさせることを目標としている（山田、佐藤、影戸、2014）。これまで、台湾、中国、韓国、インド、カンボジア、フィリピン等の高校や大学が、交流校としてWYMに参加してきた。

最近の日本の英語教育現場では、PBL（Project-Based Learning）の手法を取り入れた

アクティブラーニングの実践が活発に行われるようになってきた。また、AE (Academic English), EAP (English for Academic Purpose), BE (Business English)などを意識した英語教育にシフトすることで、将来学習者が必要とする場面に合わせた英語指導も行われている。一方WYMにおける一連の取り組みでは、与えられた大きなテーマからチームでプロジェクトを考えその内容を発表するため、PBLの手法を取り入れていると言える。また、日常的に英語で会話をしながら、本番でフォーマルな英語で発表できるレベルにまで準備するため、アカデミックイングリッシュのレベルにまで訓練できる。加えて、国内外の参加者とのオンライン交流に参加する中で、異文化コミュニケーション力を実践的な場面で身につけることができる。

これらの力に加えて、WYMに参加する学生はソーシャルスキルの獲得も可能である。具体的には、時間管理、スケジュール調整、リーダーシップトレーニング、交渉力、グループワークスキル、自己評価、他者評価などである。さらに、オンライン交流からスタートして最終的な対面発表にまで完成させる¹⁾この取り組みでは、高いICT (Information Communication Technology) スキルを磨くことが可能である(影戸, 2007)。

カンダボダ(2021)は、2020年度のWYMに参加した学生を対象に、WYMがアクティブラーニングからディープラーニングへの架け橋になっていたかどうかをアンケートと観察データで調査している。カンダボダ(2021)の参加学生にとって、WYM参加は単位取得にはつながらない正課外活動であったが、調査の結果、WYMに参加することで学生は正課授業の学びをさらに深めており、異文化交流や国際理解に向けて一層視野を広げていることがわかった。

一方、Kandaboda, Sakamoto & Hirano (2022)は、2021年度のWYMに参加した学生を対象に、活動を維持するためのモチベーションに必要な要因を調査した。質問紙調査を実施したこの研究では、学生の文化的背景や英語習熟度によってモチベーションに個人差があることを報告している。また学生はオンライン国際交流の間、教員のサポートが必要だと考えていたことも報告している。

これらの先行研究から、モチベーション、異文化理解力および国際理解力の点でWYMが参加学生の学びを促進していることが明らかになっているが、WYMの活動を通して、学生が社会人基礎力を身につけたと感じているのか、また英語力が伸びたと感じているのか、については、筆者らの知る限り調査は行われていない。一方で、WYMの取り組み内容を鑑みると、社会人基礎力の“考え抜く力”、“チームで働く力”、“前に踏み出す力”を身につけられる可能性は大いにあると考えられる。

さらに、2022年度のWYMでは、Pre-Meetingとして学生が対面形式でともに学び合ったあと、本番の発表では、ハイブリッド形式でありながら、日本側の参加者は舞台上で発表した。筆者の知る限り、このような取り組みについての調査は、ほとんどない。そこで本研究では、経済産業省が提示している社会人基礎力(2006)が身についた、そして英語力が伸びたと学生自

身が感じているのかどうかを調査する。さらに、どのような状況で困難さを感じたのかを明らかにする。

3. 研究課題

本研究の研究課題として、以下の4つを設定した。

- (1) WYMへの取り組みで学生は「社会人基礎力」が身についたと感じるのか。
- (2) WYMへの取り組みで学生は「英語力」が伸びたと感じるのか。
- (3) WYMへの取り組みで学生はどのような点に困難さを感じるのか。また困難点に英語習熟度の影響はあるのか。
- (4) WYMへの取り組みで学生は何を学んだと感じるのか。

4. 研究方法

(1) 参加者

参加者は、関西地域の2大学（A大学、B大学）に所属している大学生15名（女子9名、男子5名）であった。参加者は台湾の大学生とチームを組み、4チーム編成でWYMに臨んだ。なお、チームメンバーについては、A大学、B大学ともに、チーム間で英語力がある程度均等になるように教員がチーム分けをした。

- ・ Team A : A大学生（3名）+ B大学生（2名）+ 台湾大学生（1名）
- ・ Team B : A大学生（3名）+ B大学生（2名）+ 台湾大学生（1名）
- ・ Team C : B大学生（2名）+ 台湾大学生（5名）
- ・ Team D : B大学生（3名）+ 台湾大学生（5名）

A大学所属の6名は、A大学に勤める筆者の研究演習（ゼミ）の受講生であった。B大学所属の9名は、B大学に勤める筆者の英語授業の受講生であり、WYMには授業外活動として有志で参加した。なお、15名の所属学部、年次および英語習熟度については、第6章の表3にまとめた。

(2) 2022 World Youth Meeting 交流実施内容

2022年度は、Pre-MeetingとWYM本イベントが開催され、両方ともオンラインと対面とを合わせたハイブリッド形式で実施された。また、Pre-Meetingの2週間前から、本研究の参加学生は海外の大学との交流を始めていた。以下、その詳細を記述する。

a) Pre-Meeting

開催年によって、WYMでは異なる内容の事前活動を行っている。2022年度は、6月18日と19日にPre-Meetingを実施し、WYMに参加する日本国内の高校生と大学生が対面では約150名集まった。オンラインによる参加校もあった。Pre-Meetingの目的は、WYM2022に参加する国内の学生が英語プレゼンテーションの作り方を理解することと、教員間で指導のノウハウを共有することであった。そのため、参加校の教員は、このPre-Meetingに向けて複数回オンラインで会議を実施し、講義内容、講義用資料および本番の講義の担当、そして当日の進め方などを話し合った。

1日目は、学生は①他校の学生とチームを組み、②チーム内の各人が違う内容のプレゼンテーション作成に関する講義を受けたあと、③チームの中で自分が受けた講義内容を共有し、④教員が用意した約10枚のスライドから適切なスライドを選び、自分たちの2分間プレゼンテーションを準備し、⑤チームで発表した。

具体的には、各大学や高校の参加学生全員にA、B、C、Dのいずれかの役割を与え、他大学および高校の学生が混ざるように、かつ、A、B、C、Dの役割を担った学生が1チームとなるように組ませた。そして、学生は質の低いプレゼンテーション動画を視聴した。その後、A、B、C、Dの役割を担った学生がそれぞれ4つの部屋（A、B、C、D）に入った。A、B、C、Dの各教室では、視聴したプレゼンテーションの修正すべき点について、教員が講義を行った。それらの講義内容は、（A教室）プレゼンテーションのパフォーマンス、（B教室）スライドの作り方、（C教室）データの集め方と示し方、（D教室）プレゼンテーションの構成のコツ、であった。学生はチームの代表としてそれぞれの話を聞いたあと、チームに戻り自分が受けた講義内容をチームの中で共有した。そして再度、教員があらかじめ準備した2つ目の低質のプレゼンテーション動画を視聴した。そのプレゼンテーションのスライドが、Microsoft PowerPointファイル形式で各チームに与えられ、各チームはその低質のプレゼンテーションを協働で修正し、発表した。その後、各チームのプレゼンテーションに対して教員がコメントをし、最後に、教員があらかじめ準備したモデルプレゼンテーションの動画を視聴して終了した。

本研究の筆者Aは、学生が視聴した2つ目の低質のプレゼンテーションおよびモデルプレゼンテーションの動画を制作し、学生が使用するスライドも作成した。筆者Bは、(4)プレゼンテーションの構成のコツ、の講義を担当した。

2日目は前日の振り返りを行い、改めてSDGsについて学生同士でディスカッションする時間を設けた。そして、各グループのディスカッションの内容を発表し、教員がコメントを与えた。Pre-Meetingを実施することで、当初の目的であった“学生の発表スキルの育成”と“教員間でのノウハウの共有”が達成された。また、学生がSDGsについて理解を深めるよい機会となった。

b) 本イベントまでのオンライン国際交流

本研究の参加者は、Pre-Meetingでの対面交流を経た後、台湾の学生も交えたオンライン会議を開いて本格的にプロジェクトをスタートした。チームメンバー全員の日程を合わせることは困難であったため、可能な限り多くの学生が集まれる日に会議を設定した。日本時間の夜9時（台湾時間の夜8時）から会議をスタートすることが多く、各会議の長さは1、2時間程度であった。最初の2ヶ月ほどは1週間に一度の頻度で会議を開催したが、本番前は1週間に2度ほど集まる必要があった。学生が会議に参加した時間には個人差があり、最も多く参加した学生は30時間を超えていた。一方、アルバイトやコロナ罹患などのためにあまり頻繁に参加できなかった学生は、8時間程度であった。

本研究における日本側の担当教員は、最初の2ヶ月ほどは月に2回程度、本番前の1ヶ月は頻繁にオンライン会議に参加し、主にプレゼンテーションの構成、スライド作成、リハーサル練習などでコメントを与えた。A大学の担当教員は、ゼミの学生が参加者であったため、授業内では進捗状況の報告を受けたりプレゼンテーションの流れや英語表現のアドバイスなどを与えたりしたが、夏休みに入ってからほぼすべてのオンライン会議に参加した。

オンライン会議に使用したICTツールはZOOMとMicrosoft Teamsであった。PowerPointスライドはGoogle Driveで共有して、役割分担を決めて個人がそれぞれのページを作成し、会議で修正箇所について話し合った。また、各チームで日本と台湾の教員および学生から構成されるグループLINEを作成し、主にLINEで非同期交流を行った。

c) 本イベント

2022年度のWYM大会テーマは、“Join Hands for World Cooperation—Focusing on SDGs—” “世界と手を取り合おう—責任と行動 SDGs—”であった。この大きなテーマをもとに、参加者は各チームで自分たちのテーマを決め、プロジェクトを協働で進めた。本番での1チームの持ち時間は9分であり、その内訳は、プレゼンテーションが6分、チャットに書き込まれたQ & Aを読みどの質問に答えるかを定める時間が1分、質問への回答時間が2分であった。

本大会は8月5日と6日の2日間で実施され、会場は日本福祉大学東海キャンパスと立命館大学びわこくさつキャンパスの2会場であった。両会場での司会進行は、会場校のWYM参加教員およびWYM参加大学生が担当した。国内校からの参加者は基本的に対面で参加し、海外校は、Microsoft Teamsを使用してオンラインで参加した。なお本稿に調査協力した学生は、立命館大学びわこくさつキャンパス会場から参加した。

5日は、オープニングセレモニー、すべてのプレゼンテーション、そして学生同士が意見交換をするアフタヌーンセッションが実施された。オープニングセレモニーは、日本福祉大学東海キャンパス、立命館大学びわこくさつキャンパスおよび海外校をつなぐハイブリッド形式で実施した。その後のプレゼンテーションは、日本福祉大学東海キャンパス会場と立命館大学び

わこくさつキャンパス会場でそれぞれ進め、海外のコラボレーション校はオンラインで各会場のプレゼンテーションに参加した。後半のアフタヌーンセッションでは、学生は指定の部屋に分かれWYM本大会までの準備について意見交換をした。表1に8月5日のスケジュールを、表2に8月6日のスケジュールを示す。

表1：WYM 8月5日のスケジュール

時間	Room A (日本福祉大学会場 A)	Room B (日本福祉大学会場 B)	Room C (立命館大学会場)
10:00-12:00	—	—	各チーム プレゼンテーション
12:00-12:50	オープニングセレモニー		
13:00-16:00	各チーム プレゼンテーション	各チーム プレゼンテーション	各チーム プレゼンテーション
16:00-16:45	アフタヌーンセッション		アフタヌーンセッション

表2：WYM 8月6日のスケジュール

時間	Room A (日本福祉大学会場 A)	Room B (日本福祉大学会場 B)	Room C (立命館大学会場)
10:00-11:00	オープニングセッション (1日目のプレゼンテーションの中から、Best4に選ばれたものを視聴)		
12:30-13:20	ディスカッションセッション (学生があらかじめ作成した6つのビデオを事前に視聴しておき、興味のある内容のディスカッションに参加)		
13:20-13:35	ディスカッションセッションの内容を、各部屋の司会が全体に報告		
13:50-14:35	カフェトークセッション： 高校生	カフェトークセッション： 大学生	カフェトークセッション： 教員
14:45-15:30	WYMショーケース (海外学生のパフォーマンス、立命館大学の合気道演武など、文化紹介の時間)		
15:30-16:00	クロージングセレモニー (授賞式)		

翌日の6日は、オープニングセッション、ディスカッションセッション、カフェトークセッション、WYMショーケース、そしてクロージングセレモニーが行われた。オープニングセッションでは、5日に行った全プレゼンテーションの中から最優秀賞の候補となるベスト4のチームの発表録画を全員が会場で視聴し、審査員がコメントや修正案を与えた。続くディスカッションセッションでは、あらかじめ学生が作成した6つのSDGsに関するビデオを視聴した上で、学生は興味のあるトピックの部屋に入り、ディスカッションを行った。これらのビデオのYouTubeリンクは、8月2日に全参加者に共有されていた。

その次のカフェトークセッションでは、高校生、大学生、教職員がそれぞれ3つの部屋に分かれて入り、準備や交流に関して意見交換をした。オンラインと対面とのハイブリッド方式で

行われた。そしてWYMショーケースでは、海外の学生が歌やダンスをオンラインで、立命館大学合気道部が演武を立命館大学の舞台上で披露した。最後のクロージングセレモニーでは、文部科学大臣賞，グランプリ，プラチナ賞，ゴールド賞の授賞式が行われた。

(2) 材料

a) 参加者の基本情報調査

Pre-Meeting実施後に、本研究参加者に英語検定級や学部英語試験の取得スコア，所属学部，年次などを尋ねた。

b) WYM事後アンケート

WYM事後アンケートの目的は、社会人基礎力を身につけたと感じたか、英語力の向上を感じたか、活動全体で嬉しかったこと苦労したことは何か、教員に対する要望は何か、の4つを明らかにすることであった。

そのため、社会人基礎力を身につけたと感じているかどうかについては、経済産業省（2006）が示している3つの力を12の能力要素に分けて尋ね、6件法（全く同意する、ある程度同意する、少し同意する、あまり同意しない、ほとんど同意しない、全く同意しない）で回答してもらった。英語力の向上については、4技能別に英語力が向上したと感じたかどうかを尋ね、6件法（全く同意する、ある程度同意する、少し同意する、あまり同意しない、ほとんど同意しない、全く同意しない）で回答してもらった。活動全体で嬉しかったことや苦労したこと、教員に対する要望は、自由記述方式で答えてもらった。Appendixにアンケート内容を示す。

(3) 手順

参加者に調査目的と研究の意義について説明したのち、同意書にサインをしてもらった。

a) 基本情報調査、b) WYM事後アンケートは質問内容をMicrosoft Formsに入力して作成し、そのリンクを提示した。a) 基本情報調査は6月23日に回答してもらった。b) WYM事後アンケートはWYM終了後の2022年8月6日から8月16日の間に回答してもらった。各参加者は自身のパソコンまたはスマートフォンを用いて答えた。回答時間はa) 基本情報調査は3分程度、b) WYM事後アンケートは10分程度であった。回答データは、Microsoft Excelファイルで回収した。

(4) データの処理と分析方法

a) 基本情報調査について、英語習熟度に関するデータは記載されたスコアや英語検定級をIELTSTM テスト²⁾のスコアに換算した。b) WYM事後アンケートにおいて、6件法で尋ねた質問項目の回答は点数に置き換え（全く同意する = 6、ある程度同意する = 5、少し同意す

る = 4, あまり同意しない = 3, ほとんど同意しない = 2, 全く同意しない = 1), 回答の信頼性をクロンバックの α 信頼係数で確認した。

研究課題1の「WYMへの取り組みで学生は『社会人基礎力』が身についたと感じるのか。」に答えるために, b) WYM事後アンケートの6件法で尋ねた各項目で平均値を算出した。また, 自由記述の回答も分析した。

研究課題2の「WYMへの取り組みで学生は『英語力』が伸びたと感じるのか。」に答えるために, b) WYM事後アンケートの6件法で尋ねた各項目で平均値を算出した。また, 自由記述の回答も分析した。

研究課題3の「WYMへの取り組みで学生はどのような点に困難さを感じるのか。また困難点に英語習熟度の影響はあるのか。」に答えるために, a) 基本情報調査で確認した参加者の英語習熟度レベルと b) WYM事後アンケートの自由記述方式で尋ねた質問項目の回答とを照らし合わせ, 習熟度が困難点に影響を与えるのかどうかを確認した。

研究課題4の「WYMへの取り組みで学生は何を学んだとを感じるのか。」に答えるために, b) WYM事後アンケートの自由記述方式で尋ねた質問項目の回答を分析した。

なお本研究では, 6件法で尋ねた項目の平均値が4.5より上であればそのように感じている可能性がある, 2.5未満であればそのように感じている可能性がない, と判断することとする。

5. 結果と考察

本研究の参加者15名が申請した外部英語テストのスコアや取得級をIELTS™ (International English Language Testing System) スコアに換算したところ, 3から6.5と, 幅が大きかった (IELTS™ のバンドスコアは1.5-9点)。そこで, 参加者を3レベル (上級 = IELTS 5.5-6.5, 中級 = IELTS 5, 初級 = IELTS 3-4.5) に分けた。

参加学生の大学, 年次, 所属学部, 英語習熟度を示すスコアとそのスコアのIELTS換算点, および本研究における習熟度 (上級, 中級, 初級) を示す基本情報は表3のとおりである。

(1) 研究課題1: WYMへの取り組みで学生は「社会人基礎力」が身についたと感じるのか

b) WYM事後アンケートの「社会人基礎力」についての回答を数字に置き換えて, SPSS version 25を用いてクロンバック α 係数を算出したところ, $\alpha = .887$ と高い信頼性があったため, すべての結果を示し考察する。

経済産業省 (2006) が示す社会人基礎力の3つの項目のうち, 「前に踏み出す力 アクション」の小項目「実行力」「働きかけ力」「主体性」の平均値はそれぞれ4.9, 4.9, 5.1であった。図1は, 「前に踏み出す力 アクション」3項目の各平均値である。また, 自由記述からは, 学生が常に自分にできることは何かを意識して行動していたことが浮かび上がった。以下は, 「チーム

表3：参加学生の基本情報調査結果

名前（仮名）	大学	年次	学部	英語習熟度を示すスコアなど	IELTS 換算	本研究の習熟度
さとし	A	3	外国語	英検準1級 TOEIC755	6	上級
はな	A	3	外国語	英検3級	3	初級
ゆか	A	3	外国語	英検2級	5	中級
りんた	A	3	外国語	英検2級	5	中級
のりこ	B	1	生命科学	英検2級 TOEIC730	5.5	上級
りょう	B	2	経営	TOEIC780	6	上級
けん	B	1	経営	英検2級	5	中級
みのる	B	1	経営	英検3級 TOEIC515	4.5	初級
すず	B	2	経営	IELTS 5.5 TOEIC640	5.5	上級
りほ	A	3	外国語	英検3級	3	初級
かすみ	A	3	外国語	英検準2級	4	初級
さとみ	B	2	経営	英検準1級 TOEIC700	6	上級
あきな	B	2	経営	英検2級 TOEIC605	5.5	上級
ごう	B	3	情報理工 (英語)	TOEFL iBT 90+ SAT 1350-1400	6.5	上級
そうた	B	1	食マネジメント	TOEIC600	5	中級

のために貢献できたことはなんですか？」という自由記述式の質問に対する参加者の回答である。

「チームのために貢献できたことは何ですか？」

- ・これから活動していく上で必要となるパワーポイントの土台を共有したり、自分たちのしたいことを明確に理解しようとする上で、わからないところがあれば放っておかずに進んで人にきいて理解しようとした。(ゆか)
- ・パワーポイントの修正点をあげた(言った)。他の人があまり自分の意見を言う人ではなかったので、その人たちが持っているであろう質問などを先生などに投げかけた。(りょう)
- ・英語力に自信はなかったが進んで話すことは得意なので自分の意見などを進んで言うようにした。(りんた)

- ・スケジュール管理と流れ（すず）
- ・みんなの日程を調整したり，日本人と台湾人メンバーの架け橋となるように努力した。（さとみ）
- ・テストの準備をしなくちゃいけない時でミーティングに出席できなくても自分の出来ることを全うした。（みのる）
- ・I used my leadership skill and discussion skills during the preparation of presentation. Additionally, I participated actively on the group meetings and gathered all the group members' ideas.（ごう）

以上，6件法で尋ねた項目の平均値と自由記述の回答結果から，参加者はWYMの活動を通して「前に踏み出す力」が身についたと感じている可能性があることがわかった。このことは，小西（2021）の「積極的にコミュニケーションを測ろうとする態度，積極的に交流を楽しむ態度，文化面で情報交換を楽しむ様子がみられたため，ビデオチャットによるオンライン国際交流は語学学習だけではない大きな学びをもたらした」という報告と同様の結果であると考えられる。

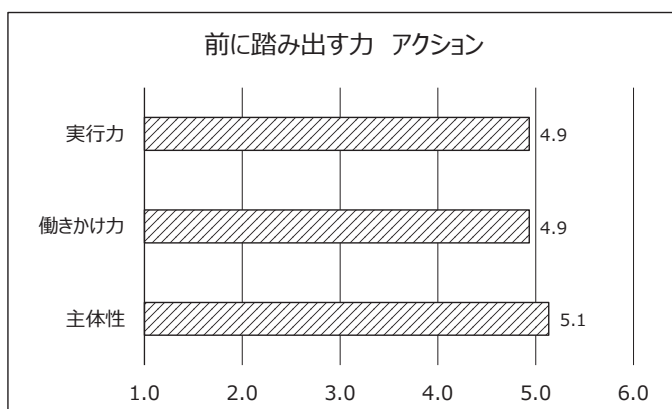


図1：「前に踏み出す力 アクション」3項目の各平均値

次に，「考え抜く力 シンキング」3項目の小項目“創造力”，“計画力”，“課題発見力”の結果を図2に示す。各平均値は順に，4.8，5.0，5.1であった。また，自由記述からは，活動全体を通して参加者は自分たちのテーマについて考え，アイデアを出し合い，計画を立てていた様子がみられた。以下は，「チームのために貢献できたことは何ですか？」および「あなたが成功したと感じたことを，具体的に書いてください」という自由記述式の質問への回答で，“考え抜く力”と関連があると考えられるものである。

「チームのために貢献できたことは何ですか？」

- ・ テーマ決めの時に、自分のグループにしかない強み（台湾，韓国，日本人がいる）を発見し、それを活かせるテーマを思いついた。結果的にテーマが広すぎて再検討することになったが、実現可能そうなアイデアを新たに思いつきテーマ決めにおいて貢献出来たと思う。（はな）
- ・ テーマの発展性や将来性のアイデアに貢献できたと思う。（あきな）

「あなたが成功したと感じたことを、具体的に書いてください」

- ・ まず何を発表するかテーマを決める時，また，どういう流れや構成で話すかなど大まかな部分を提案できた（かすみ）
- ・ 自分のアイデアが採用されたこと。（あきな）
- ・ 自分の言葉で各スライドの SCRIPT を書いて，そこから訂正は入ったけれど，自分のものを肯定してもらったし，発表もうまくいった。（ゆか）

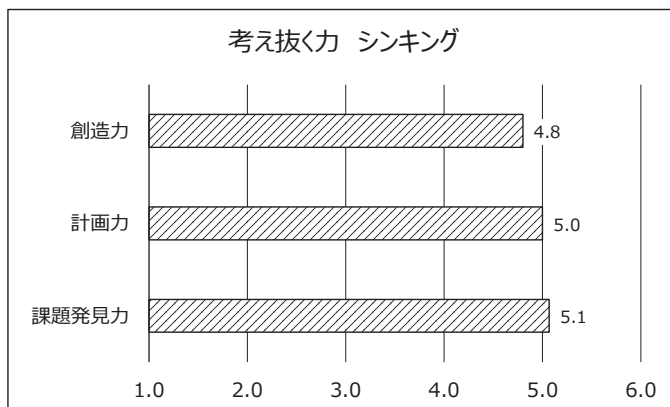


図2：「考え抜く力 シンキング」3項目の各平均値

以上，6件法で尋ねた項目の平均値と自由記述の回答結果から，参加者はWYMの活動を通して「考え抜く力」がついたと感じている可能性があることが明らかになった。

最後に，3項目の中の「チームで働く力 チームワーク」の小項目“ストレスコントロール力”，“規律性”，“状況把握力”，“柔軟性”，“傾聴力”，“発信力”の結果を図3に示す。平均値はそれぞれ4.6，4.5，5.0，5.1，5.3，5.1であった。また自由記述からは，チームメンバーについての言及，コミュニケーションに注意を向けていた様子，などがみられたことから，“チームで働く力”がついたと感じていたことが示された。以下は，「あなたが嬉しく感じたことを，具体的に書いてください」および「あなたが成功したと考えていることを具体的に書いてください」という質問に対して，チームで働く力に関連すると考えられる回答の一部である。

「あなたが嬉しく感じたことを、具体的に書いてください」

- ・良いメンバーに恵まれたこと。英語を話せるようになりたいと思えたこと。(はな)
- ・日程が迫ってきてすれ違いがあったけど、なんとか完成させることができたし、普通だったら関わることのない海外の大学生と活動できたのが嬉しかった。(ゆか)

「あなたが成功したと考えていることを具体的に書いてください」

- ・発表を終えて、とてもいいチームだったと実感できるくらい一生懸命に取り組めたこと。(はな)
- ・action planを実行する時に、それぞれが得意な分野で率先して仕事をした事でほかのメンバーとの仕事の分担がうまくいったし、ほかのメンバーを尊重しながら仕事をする事が出来た。(のりこ)
- ・Teamwork. I listened to all the group members' idea and opinions, and distributed individual works on every group members according to their strong parts, and everyone followed very well till the end of the presentation. In this point, I feel very satisfied and successful on my work done. (ごう)

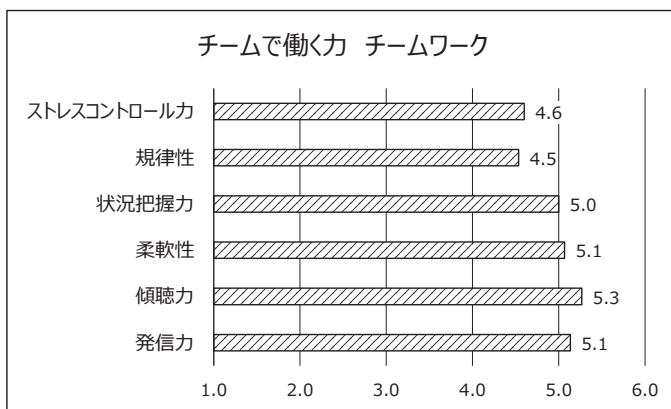


図3：「チームで働く力 チームワーク」6項目の各平均値

一方、「チームで働く力」のうち、「規律性」は4.5であり、力がついていないと感じていることが示された。その理由として、ミーティングに参加できなかったことが影響を与えているのではないかと考えられる。本来、ミーティングには出席するべきなのに、できなかった学生が多くいた。例えば、「後悔していること・失敗したと感じたことを、具体的に書いてください」という自由記述の項目に対して、ミーティングに参加できなかったことを後悔している複数の参加者がおり、以下はその回答の一部である。

「後悔していること・失敗したと感じたことを、具体的に書いてください」

- ・ミーティングは夜9時と時間が決まっていたので序盤部活やバイトでなかなかミーティングに参加できなかったこと。(りんた)
- ・I can't (couldn't) attend some meeting. (りほ)
- ・後悔してることは、もっと沢山ミーティングしたら良かった。(さとみ)

山内 (2014) は、「自由にまかせる交流よりも具体的なタスクを課す方が参加頻度の増加につながった」と結論づけている。本研究の取り組みも具体的な目的があり、ミーティングを開催していた。そのミーティングへの参加が必要だと理解していながら、参加できなかったため、そのネガティブな意識が“規律性”の結果に反映された可能性が考えられる。

以上、6件法で尋ねた項目の平均値と自由記述の回答結果から、参加者はWYMの活動を通して“規律性”以外の項目の「チームで働く力」が身についたと感じている可能性があることが明らかになった。

(2) 研究課題2：WYM への取り組みで学生は「英語力」が伸びたと感じるのか

b) WYM 事後アンケートの「英語力」についての回答を数字に換算し、SPSS version 25 を用いてクロンバック α 係数を算出したところ、 $\alpha = .776$ と高い信頼性があったため、すべての回答結果を示し考察する。図4は、リーディング、リスニング、スピーキングおよびライティングにおける項目別の平均値である。

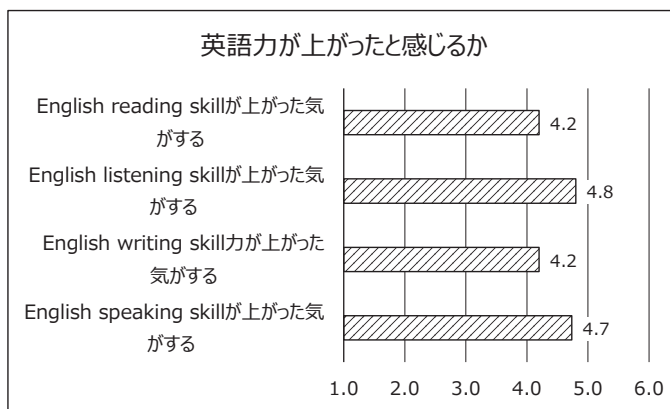


図4：「英語力が上がったと感じるか」4技能の各平均値

リスニングとスピーキングがそれぞれ4.8と4.7であることから、参加者は音声面でのスキルが向上したと感じているが、リーディングとライティングが各4.2と4.2であることから、文字媒体のスキルについては向上したと感じていないことがわかった。

その理由として、非同期型のテキストメールよりも同期型のオンライン会議でWYM準備を進めていたことが原因だと考えられる。また、テキストメッセージのやり取りの際には、参加者がオンライン翻訳ツールを多用する様子が観察された。そのため、文字面でのスキル向上をあまり感じなかったと考えられる。自由記述からも、翻訳ツールを使用していたことが示されており、「英語力不足を感じた場面について、詳しく書いてください」という質問項目に対する回答を以下に示す。

「英語力不足を感じた場面について、詳しく書いてください」

- ・ミーティング中など自分の意見を持っても翻訳してからでしかしっかりと伝えられないため、会話に少し時間がかかった（りんた）
- ・I used Deep L too much.（りほ）（注：Deep L = オンライン翻訳ツール）

古村（2022）は、コスタリカの大学生と日本人大学生とのオンライン交流において、日本の大学生が英語力に不安感を持っていた学生もいたと報告しており、本研究でも同様の結果がみられたと考えられる。

以上、6件法で尋ねた項目の平均値と自由記述の回答結果および教員の観察結果から、参加者はWYMの活動を通して英語力のうちスピーキング、リスニング力は伸びたと感じているが、リーディングとライティングについては、向上したと感じていないことが明らかになった。

(3) 研究課題3：WYMへの取り組みで学生はどのような点に困難さを感じるのか。また困難点に英語習熟度の影響はあるのか。

表3に示したとおり、参加者15名の外部英語テストのスコアや取得級をIELTS™（International English Language Testing System）スコアに換算したところ3から6.5と、幅が大きかった（IELTS™のバンドスコアは1.5-9点）。そこで、参加者を3レベル（上級 = IELTS 5.5-6.5, 中級 = IELTS 5, 初級 = IELTS 3-4.5）に分けた結果、上級が7名、中級が4名、初級が4名であった。表4は、IELTS™のバンドスコア3から7のCan-doリストである（日本英語検定協会）。

自由記述の質問「英語力不足を感じた場面について、詳しく書いてください」に対し、上級者も初級者も、自分の英語力に対する自信のなさをあげていた。上級者と初級者の回答の一部を以下に示す。

「英語力不足を感じた場面について、詳しく書いてください」

上級者（IELTS 5.5-6.5）の回答

- ・I left all the questions and answers to my friends.（さとし）

- ・わからない単語があり調べている時に相手を待たせてしまった時に会話が中断してしまった (のりこ)
- ・英語で話すことに自信がなかったため、ミーティングでの積極性に影響が出た。(あきな)
初級者 (IELTS 3-4.5) の回答
- ・自分から発言できるほど自分の英語に自信が持てなかった時。(はな)
- ・台湾の人たちの話している英語がうまく聞き取れないことが多々あったこと。(みのる)
- ・パワーポイントのスライドについて、zoom 上で話し合うときに、言いたくても伝えることができない時が多々あった (かすみ)

一方で、上級者はグループメンバーが円滑に会議を進められるように意識して英語を使用していたことがわかった。以下は、「英語力不足を感じた場面について、詳しく書いてください」に対する上級者の回答である。

- ・その場で日本人が日本語で言ったことを台湾の子のために、英語に訳すのに苦労した (すず)
- ・専門用語がわからないとき。(さとみ)
- ・自分のミスを謝る際に丁寧で誠意のある言葉を使いたかったが、うまい言い方が思いつかなかった。(あきな)

表 4 : IELTS™ バンドスコア別の can-do リスト

スコア	バンドスコアの解釈
7	時折、不正確さや不適切さがみられ、また状況によっては誤解が生ずる可能性もあるが、英語を駆使する能力を有している。複雑な言語も概して上手く扱っており、詳細な論理を理解している。
6	不正確さ、不適切さ、および誤解がいくらかみられるものの、概して効果的に英語を駆使する能力を有している。特に、慣れた状況においてはかなり複雑な言語を使いこなすことができる。
5	部分的に英語を駆使する能力を有しており、大概の状況において全体的な意味をつかむことができる。ただし、多くの間違いを犯すことも予想される。自身の分野においては、基本的なコミュニケーションを行うことができる
4	慣れた状況においてのみ、基本的能力を発揮できる。理解力、表現力の問題が頻繁にみられる。複雑な言語は使用できない。
3	非常に慣れた状況において、一般的な意味のみを伝え、理解することができる。コミュニケーションが頻繁に途絶える。

また、「苦労したことは何ですか?」という質問に対し、上級者、初級者ともに、コミュニケーション不足や時間が足りなかったことを困難点としてあげていたが、初級者は特に自身の英語力に自信がなかったことを記述していた。

本研究における初級者 (IELTS3) の英語力は、表 4 の Can-do リストによると、“理解力、

表現力の問題が頻繁にみられる、コミュニケーションが頻繁に途絶える”ことから、彼らが「英語でうまく伝えられない」、と感じていたことは当然だと言える。一方、本研究における上級者（IELTS 6）の英語力は、表4のCan-doリストによると、“不正確さ、不適切さ、および誤解がいくらかみられるものの、概して効果的に英語を駆使する能力を有している。特に、慣れた状況においてはかなり複雑な言語を使いこなすことができる”ことから、チームメンバーのために通訳的な役割を担ったり、英語で丁寧な言い回しを探していた時にうまくいかなかった場合に、自分の英語力不足を感じていたことが明らかになった。つまり、参加者が感じていた困難点は、英語習熟度により異なっていたと考えられる。

(4) 研究課題4：WYMへの取り組みで学生は何を学んだと感じるのか

「今回の経験から学んだことを、具体的に書いてください」という質問に対する回答内容は、多岐に渡っていた。英語の表現、発表方法、調査方法、チームワーク、異文化理解、リーダーシップの大切さに加え、会議を行う際の留意点に自ら気がつき、学んだと感じていた。根拠となるのは、以下の回答である。

- ・違う大学の人、違う国の人など色々な立場の人と関わることで協調性が身についたと思う。(あきな)
- ・During the WYM, I really learned a lot. Leadership, discussion skill, presentation skill, cooperation skill, teamwork and lastly, improvement in my English. (ごう)
- ・大会でたくさんのプレゼンをみて思ったのは、プレゼンのスライドにすべての情報を盛り込むのではなくイラストで簡潔に伝えることで聴衆がプレゼンに興味を持ってくれると感じた。(のりこ)
- ・リーダーは必要だけど、リーダーっぽい人がいない場合は自分がリーダーをやったほうが良いということ。なぜならそうじゃないと誰も動き出さないから。(りょう)
- ・効率的に進めるためには、役割を分担して、パワポ作成、発表をしないといけないということがわかった。(かすみ)
- ・時間の貴重さ(を学んだ)。なんでも良いから思ったことをその時に発言することの大切さ(を学んだ)。(はな)
- ・話し合いの前には、今日話し合うことをまとめたwordなどを作るべき。zoomを開催してもふわふわして具体的な目的がないと進まないと感じました。また、実施要項のようなものを作ることによって、事前にある程度考えてきやすいので、今後グループワークがある時はそうしようと思いました。(すず)

小西(2021)の報告と同様に、WYMでの取り組みは参加者に単なる語学学習だけではない

大きな学びをもたらすことが示された。英語を話すことに自信がない中でも、積極的にコミュニケーションを図ろうとし、チームのために貢献しようとしたことがわかった。また、山内(2014)が報告しているように、話すトピックを自由にさせるのではなく、ある決められたテーマや目的があるWYMでは、効果的なオンライン交流ができたと考えられる。さらに、古村(2021)の報告と同様に、本研究においてもWYMの取り組みの中で、英語力に不安感を持つ学生、楽しみを感じた学生がいたことがわかった。

一方、Kandaboda, Sakamoto & Hirano (2022)では、WYM2021に参加した学生は教員からのサポートを求めていることが明らかになったため、WYM2022では教員はすべてのオンライン会議に参加した。その関わり度合いに対しては、「十分であった」という意見と「学生だけで会議をする時間がもう少し欲しかった」という意見があった。従って、教員の関わり度合いは、今後の課題となることがわかった。

6. まとめと提言

まとめの前に、本研究の限界点をいくつか示す。まず、本研究は参加者に対するアンケート回答のみをデータとしているため、今後は録画やフィールドノートなど複数のデータをもとにした研究が今後必要となる。その際には、Grounded TheoryまたはNarrative Analysisなどを用いて、より科学的に分析することが望ましい。また「社会人基礎力」「英語力」の向上については、活動の事前と事後との違いを比較する研究が待たれる。さらに、サンプル数が15名と少なかったため、研究の汎用性を高めるには、将来的により多くの参加者を対象とした研究が望まれる。

上記の限界点を踏まえて、本研究で明らかになったことをまとめる。

(1) WYMへの取り組みを通して、学生は経済産業省が2006年に提示した「社会人基礎力」の12の能力要素のうち、「チームで働く力 チームワーク」の中の“規律性”以外のすべての揚力要素が身についたと感じている。

(2) WYMへの取り組みを通して、学生はリスニング力とスピーキング力が向上したと感じているが、ライティング力とリーディング力は向上したと感じていない。

(3) WYMへの取り組みを通して、学生は英語力不足を感じていた。ただし、初級者は思ったことが言えない場面で困難を感じていたのに対し、上級者はチームメンバーとの円滑な会議を進めるための通訳的役割が十分果たせなかったり、丁寧な言い回しがみつからなかったりした時に、困難を感じていたことがわかった。

(4) WYMへの取り組みを通して、学生は語学力以外には、発表方法、調査方法、チームワーク、異文化理解、リーダーシップの大切さおよび会議を行う際の留意点を学んだと感じていたことがわかった。

以上の点を踏まえ、今後 WYM のような国際交流に取り組む際の提言をあげる。

1. 学生のライティング力やリーディング力が向上するように、オンライン会議以外にテキストチャットなどの非同期交流も促す。
2. 授業時間やお昼休みなどを利用するなど、参加学生がより頻繁にミーティングに参加できるように配慮する。
3. 顔の表情や動作を駆使すれば英語力の補完になり、スムーズな国際交流の助けになることを参加者に伝える。
4. 指導にあたる教員は、関わる度合いを慎重に見極めて過干渉にならないようにする。

本研究が、オンライン国際交流のさらなる進展とグローバル人材育成の一助になることを願う。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号 17K02908）、科学研究費補助金若手研究（課題番号 20K13120）および公益財団法人高橋産業経済研究財団の助成を受けて実施しました。本研究のデータ収集に協力していただいた学生および本論文に貴重なご指摘をいただいた査読者の先生方に心より感謝申し上げます。

注

- 1) なお、2020年と2021年は完全オンラインで、2022年はハイブリッド型となっている。
- 2) 学生の英語習熟度について、英検、TOEIC[®]、TOEFL iBT[®]、IELTS[™]等のスコアや取得級で回答してもらったため、本研究では、IELTS[™]に換算した（詳細は、<https://au-ryugaku.com/comparison-table/>）。

引用文献

- 影戸誠（2007）. 「国際交流場面でのメディア活用と英語プレゼンテーション」. 『教育メディア研究』14(1), 81-95.
- カンダボダ B. パラバート（2021）. 「ディープラーニングを目指した大学教育における国際交流の試み—授業内学習から課外活動まで—」. 『立命館高等教育研究』21, 229-244.
- 経済産業省（2006）. 「社会人基礎力」<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
- 小西正恵（2021）. 「ビデオチャットでのイータンデム・オンライン国際交流におけるコミュニケーションのための協働」. *Language Education & Technology*, 58, 43-67.
- 諏訪康雄（2013）. グローバル時代の教育について考える『みんなの教育』. <https://www.wakuwaku-catch.com/%E3%82%AD%E3%83%A3%E3%83%AA%E3%82%A2%E6%95%99%E8%82%B2/column%E8%AB%8F%E8%A8%AA%E5%BA%B7%E9%9B%84%E5%85%88%E7%94%9F4/>
- 日本英語検定協会英検（2017）. 「準1級 Can-do リスト」『英検 Can-do リスト一覧』. <https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/cando/list.html>
- 日本英語検定協会英検「IELTS バンドスコアの解釈について」. <http://www.eiken.or.jp/ielts/result/pdf/>

interpretation-of-ielts-bandscores-j.pdf

- 古村由美子 (2022). 「コスタリカの大学生とのオンライン交流：日本人学生は何をどのように感じ、学んだのか」. *Artes Mundi*, 07, 77-85.
- 文部科学省 (2014). 『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』
- 山内真理 (2014). 「オンライン異文化交流の事例研究—A case study of online intercultural. exchange—」. 『千葉商大紀要』 51, 261-274.
- 山田雅之・佐藤慎一・影戸誠 (2014). 「プロジェクト型学習における SNS 可視化システムを利用した学習支援の事例研究」. 『教育メディア研究』, 21(1), 21-31.
- Hung, Y., & Higgins, S. (2016). Learners' use of communication strategies in text-based and video-based synchronous computer-mediated communication environments: Opportunities for language learning. *Computer Assisted Language Learning*, 29(5), 901-924. doi:10.1080/09588221.2015.1074589
- Kandaboda, P., Sakamoto, T., & Hirano, A. (2022). Facilitation Online International Exchange Programs: How students maintain their motivation? *INTED2022 Proceedings*, 1369-1375.
- World Youth Meeting (2022). <https://japannet.gr.jp/>

Appendix

(WYM 事後アンケート)

This is a reflectional-survey regarding World Youth Meeting. Your answers do not relate to any of your course evaluation, so answer freely (the data will be used anonymously). Please answer all the questions in either English or Japanese. こちらは、WYMの振り返りアンケートとなります。回答する内容と授業の評価は一切関係ありませんので自由にお答えください（データは匿名で使います）。回答は、日英どちらでも結構です。

A: WYMへの取り組みを通して、どのように感じているか、あなたの気持ちを選んでください（全く同意する、ある程度同意する、少し同意する、あまり同意しない、ほとんど同意しない、全く同意しない）

1. English speaking skill が上がった気がする
2. English writing skill 力が上がった気がする
3. English listening skill が上がった気がする
4. English reading skill が上がった気がする

B: WYMへの取り組みを通して、どのように感じているか、あなたの気持ちを選んでください（全く同意する、ある程度同意する、少し同意する、あまり同意しない、ほとんど同意しない、全く同意しない）

1. 「物事に進んで取り組む力」がついた気がする
2. 「他人に働きかけ巻き込む力」がついた気がする
3. 「目的を設定し確実に行動する力」がついた気がする
4. 「現状を分析し目的や課題を明らかにする力」がついた気がする
5. 「課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力」がついた気がする
6. 「新しい価値を生み出す力」がついた気がする
7. 「母語（または英語）で自分の意見をわかりやすく伝える力」がついた気がする
8. 「相手の意見を丁寧に聴く力」がついた気がする
9. 「意見の違いや立場の違いを理解する力」がついた気がする
10. 「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」がついた気がする
11. 「社会のルールや人との約束を守る力」がついた気がする
12. 「ストレスの発生源に対応する力」がついた気がする

・チームのために貢献できたことについて、具体的に書いてください

- ・ 英語力不足を感じた場面について、詳しく書いてください
- ・ 苦労したことは何ですか？具体的に書いてください
- ・ 後悔していること・失敗したと感じたことを、具体的に書いてください
- ・ あなたが成功したと感じたことを、具体的に書いてください
- ・ あなたが嬉しく感じたことを、具体的に書いてください
- ・ 今回の経験から学んだことを、具体的に書いてください
- ・ 今後の参加者のために、先生へのリクエストを、具体的に書いてください

Student Learning in an International Exchange Program: Developing Skills for a Globalized World

Ayako HIRANO

Prabath Buddhika KANDUBODA

Abstract

This paper discusses what students who participated in an English presentation competition felt they had acquired. Fifteen university students from two universities in the Kansai region participated in the World Youth Meeting (WYM), a collaborative English presentation event for Asian students. They worked online with Taiwanese students for about four months to prepare for WYM. The research questions are (1) whether WYM participants feel that they developed their “Fundamental Competencies for Working Persons” (FCFWP) as defined by the Japanese Ministry of Economy and Trade and Industry, (2) whether WYM participants feel that their “English proficiency” has improved, (3) what difficulties WYM participants experienced, and whether their English proficiency levels affect these difficulties, and (4) what WYM participants feel they have learned from the WYM initiative. To answer these questions, we conducted a questionnaire survey and analyzed the data. The results revealed that students felt their competency improved in all areas of the FCFWP except “discipline” and that their English speaking and listening skills had improved. They did not feel that their English writing and reading skills had improved. In addition, the difficulties they experienced differed slightly depending on their level of English proficiency. Furthermore, students felt that they learned English expressions, presentation methods, research methods, teamwork, cross-cultural understanding, and the importance of leadership through WYM. Based on the results of this study, we have discussed and proposed points to be noted and measures for improvement when engaging in international collaborative activity in the future.

Keywords: communication skills, Fundamental Competencies for Working Persons, English language skills, international exchange, collaborative practice